

ソハヤノツルキ（太刀）

徳川家康公（1542-1616）が晩年に枕元に置いていた 13 世紀の太刀。家康公は、死後、この刀を自分の体と同じように考えてほしいと願った。これは、死してなお子孫を守るという誓いを象徴するものであった。刀と遺品は、死後まもなく久能山東照宮に移された。

19 世紀末まで、刀は神社の最も神聖な場所に保管され、家康公の霊が眠る場所として崇められていた。刀が博物館に移されると、家康公の魂は別のものに移された。

この刀には正式な名前はないが、刀身に刻まれた文字から通称「ソハヤノツルキ」と呼ばれている。刀身に刻まれた文字の正確な意味は明らかではなく、製作者のサインもない。しかし、刀身の姿形の特徴から、三池（現在の福岡県）の刀匠である「光世」の作であることがわかり、「三池刀」とも呼ばれるようになった。

例年 4 月には、家康公の死を追悼するために 4 月 17 日に行われる「御霊祭」に合わせて展示されている。

重要文化財